



TITLE:

<批評・紹介> 根本誠著「専制社會における抵抗精神：中國的隱逸の研究」

AUTHOR(S):

福永, 光司

CITATION:

福永, 光司. <批評・紹介> 根本誠著「専制社會における抵抗精神：中國的隱逸の研究」. 東洋史研究 1953, 12(4): 358-360

ISSUE DATE:

1953-06-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/138974>

RIGHT:

批評・紹介

專制社會における抵抗精神

——中國的隱逸の研究——

根 本 誠 著

昭和二十七年十月五日 創元社
A5判 二五八頁 五〇〇円

「現代の生活は一般社會は勿論、學界までがチンドン屋的ではないのか」とは著者の此の書の後記における慨歎の語である。だから此書は「チンドン屋的でない學問」への一つの試論として提示されたものと理解して良いであらう。確かに此の書を一讀した我々は、著者の學界に對する新しい抱負と學問に對するしめやかな熱情と自己に對するひたむきな眞摯さとを感得せずには居れない。此の點、我我はその抱負の具體的成果如何の問題はしばらく措くとして、此の著者の熱情と眞摯さとに何よりも先ず敬意を表すべきであらう。

著者は民國革命以前の中國の全時代を專制時代として規定し、此の專制時代の社會における批判的抵抗的存在として隱逸を性格づけ、此の隱逸の存在意義を社會史的に問わんとされる。第一章序論、第二章隱逸の概念、第三章隱逸の類型、第四章隱逸の生活實態とその特徴、第五章隱逸發生の社會史的基盤というのが此の書の構成である。著者の序文によれば、第一章から第四章までは隱逸の概念を明かにするために書かれたものであり、第五章は隱逸の發生基盤としての社會を分析したもので、此の研究の本筋をなすものであるが、紙數の關係で原稿を十分の一に壓縮したものであると云う。

第一章序論。ここで著者は隱逸の問題性を素描している。隱逸は專制社會に對する批判者であり抵抗者である。だから隱逸は專制社會を鋭く解くメスであり、隱逸の吟味は專制社會を暴露する事になる。しかも此の隱逸は舊中國社會に存在し得たばかりでなく稱讃されてさへいた。著者は此の點を特に問題とする。そして此の讚美の本質を隱逸の現實否定による自由と平和の獲得に指摘する。隱逸は相對的現實を超えて沈潜する。その沈潜が批判であり抵抗である。然しその沈潜はまたそのまま高揚であり、平和と自由の世界——著者はこの世界を「別な現實」或「第三の世界」と呼ぶ——への飛翔である。その第三の世界は宗教的な來世でも神仙的な幻想の世界でもなく別な現實である。ここに隱逸の隱逸としての本質・特徴がある。従つて隱逸の本質特徴（概念・類型・生活實態）を明かにする事はそのまま專制社會を明かにする事であり、專制社會の構造を解明する事はそのまま隱逸存在の必然性を明かにする事になると著者は云う。我々はここで隱逸の存在をその内面性と社會性の密接な連關のもとに究明しようとする著者の企圖に注目すべきであらう。

第二章、隱逸の概念。著者はここで先ず隱逸が中世期的存在でありながら中世期を超越する存在でもある事を論じ、次いで隱逸の概念を隱者と逸民とに分析して、そこから隱逸の「世捨て人」としての性格を明かにし、その「世を捨てること」——逃避のもつ眞實の意義がいかなるものであるかを考察する。隱逸は世捨て人である。彼は專制社會に對する批判と抵抗とを世を捨てる行爲として示した。その「捨てる」は主体的であり、その現實否定は價值轉換であり、一切の相對的なものを捨てる事によつて自己における根源的なものを拾うことである。彼は世を逃れて孤獨になる。然しその孤獨は

完全と自由を意味する。かくて著者は隱逸の概念を「否定」「主体性」「價值轉換」「自由」「第三世界」の諸概念として規定し説明する。我々はこれらの諸項における著者の柔軟な思惟に刮目すべきであらう。

第三章、隱逸の類型。隱逸の概念を一應明かにした著者は、更にその特徴、社會存在の意義を明確にするために隱逸の類型化を試みている。この場合、著者は先ず社會存在として隱逸と類似する遊俠と神仙（前者は社會批判の點で、後者は現實から飛翔した點で）を取りあげて隱逸との類型的區別を明かにし、次いで隱逸自身の類型がいかなるものであるかを考察する。舊中國社會の隱逸はその生態上大きく三つに分類する事が出来る。個人型と社會型と中間型とにこの中、個人型は更に不交型と自殺型に、社會型は改革型と事務型に分ける事が出来、中間型は文人型にあてることが出来る。著者は歴代諸傳の隱逸の名を列挙しながら、此の分類の根據を説明しつつ隱逸の存在意義を考察する。ただ然しここでは分類の對象が長い期間にわたり廣汎な領域に及んでいるために、やや雜駁の嫌いがあり、形式的羅列の弊が感ぜられなくもない。

第四章、隱逸の生活實態とその特徴。隱逸の概念を明かにし、隱逸の歴史的人物をあげて類型的考察を試みた著者は、更にその生態の特殊性をつかみ生活實態を考察する事によつて具体的事實の裏づけを企圖する。この場合、ある特定の一人の隱逸を問題とするのではなく、隱逸と呼ばれるものに共通した生態上の特徴を求めようとするのが著者の意圖である。「孤獨」「清貧」「固拙」「有閑」「悠々自適・逍遙」「飲酒」の諸項に分たれ、全章の長さは約百頁、他の各章に較べて最も長く、それだけに著者の最も力を注いだ部分であらう。

うと推察される。孤獨、清貧、固拙の三者は、隱逸を決意し隱逸を押し通してゆく努力の面であり、有閑、悠々自適は隱逸の安住の世界、喜びの世界、目的成就の世界である。著者は隱逸の生活をこれらの點で把握し理論づけながら、これを支える社會的な基盤にも目を注いでいる。

第五章、隱逸發生の社會史的基盤。此の章は第四章までが隱逸に關する概念的生態的考察であるのに對し、隱逸の成立と存在に關する社會史的考察であり、ここで作者が問題とするのは、隱逸が現實の如何なる社會構造のうちから輩出したか、此の社會に對して彼等が如何に隱逸としてありつづけたか、從つてその彼等の根源的立場とは何かという事などに就てである。著者は先ず舊中國社會における大家族制度の存在と地方村落の特殊性を指摘しつつ、此の社會が社會構造的に一つの隱逸性を包蔵している事に論及する。次に中國專制國家の組織機能を考察し、その矛盾・虛偽・煩瑣・歪曲などが隱逸を成立せしめ存在せしめる基盤となる事を明かにし、更に市民性が自覺され發達するに至らなかつた此の社會の都市の特質において隱逸の存在を考え、最後に隱逸發生の思想的基盤として中國思想の一般的性格——政治の優先、汎神論的、自然的、運命論的諸傾向を指摘する。ただ此の章における論述は著者自身も斷つてゐる如く、紙數の關係もあつて、あらましの見透しを語るものに過ぎないが、著者の見解を察知するには充分であらう。

さて以上私は此の書の内容のあらましを篇章を逐いつつ紹介してみたのであるが、既に述べた如く、此の書の著者は隱逸をその内面性において洞察すると共に、その存在意義を歴史的社會的に考察せんとするものである。つまり單なる「精神」でもなく單なる「社

會」でもない哲學的歴史的立場が著者の企圖する注目すべき立場だと思われる。「專制社會における抵抗精神」という標題の「社會」と「精神」の語も此の意味において著者の關心の所在を端的に示しているとも見られよう。そして歴史學の專攻者であると共に幼少からキリスト教に親んだという著者は、此の企圖をすぐれた成果として此の書に示している。確かに著者の深く豊かな思惟と隱逸の問題を自己の問題として考える眞摯さは此の書を読む者に深い感銘を與えずにはおかぬであらう。そしてともすれば philosopheran がおき去りにされがちな現在の中國哲學の分野では此の書は注目されたい著作の一つだと思ふのである。

然し此の書にも勿論問題は殘されている。此の書を特徴づける歴史的立場と哲學的立場の不協和音が時々耳に残る様に思われるし、特に隱逸の內面的超越と歴史との關係は一應説明されながら何か洞然たらざるものが感ぜられ、又、隱逸が著者の主觀において殊更に理念化されている嫌がないでもない。(例えば莊子刻意篇の山谷のつた道德的立場と見るのは)また、隱逸の存在を對社會的關係から説明するに急で、彼等の「性格」の問題が餘り取り上げられていず、(宋の范曄が後漢書逸民傳の序論でこ)隱逸の絶望や不安が對社會的(の點を問題にしているのは興味深い)なものであると共に自己自身の問題であり、人間存在そのものに内包された問題である事もつと問題にされて良いのではなからうか。隱逸が批判者・抵抗者であると共に宗教者であり、ただそれがキリスト教的神に祈らず、佛教的來世をこいねがわず、嚴しく自己自身に堪えぬき、あくまで人間の立場を棄てなかつたという點で中國のである事は著者も認められるであらうから。そして隱逸を此の様な中國の宗教者として理解する時、彼における歴史の問題はもつと深

い立場で對決されていたのではなからうか。尤も隱逸も亦歴史的存在であり、その存在意義を社會史的に考察する事は充分可能でもあり重要でもある。そして此の點に關する著者の説明(第五章)は簡略ではあるが容易に首肯出来るのである。

然し、ともかく此の書は「舊中國社會における隱逸の存在意義を社會史的に問わんとする」ものであり、「中國史の中に人間存在を尋究しようとする」ものである。我々は著者のこの様な意圖に注目すると共に、今後の研究に大いなる期待を寄せるものである。そしてその試論とも云うべき此の書が「チンドン屋的」でない事だけは確かであらう。

(福永光司)